

「遺物からみた『渦』」

水川慶紀

1. はじめに

縄文・弥生・古墳時代など現在に至るまでの長い歴史を彩った遺物たちは、多くの人々を魅了してきた。特に、デザインや意匠は、その華やかさや趣深さなどから人々を惹きつけてきた。今回は、デザインや意匠、技術に「渦」をうかがうことのできる遺物を概観し、「渦」の意味やおもしろさ、変化のあり方を考える。

2. 「渦」の意味・分類

○「渦」の意味

- ①うず、うずまき。「渦紋」
- ②うずまく。

大修館書店 1984 『大修館 新漢和辞典改訂版』より

○「渦」の分類

- ①形状としての渦…形状から捉えられる渦
- ②文様の渦 …土器などの遺物に描かれた（刻まれた）渦
- ③技術にみる渦 …土器から読み取ることのできる土器製作にかかわる渦

3. 遺物にみる「渦」

①形状としての渦

<軟体動物門 Phylum Mollusca 腹足綱 Class Gastropoda (ふくそくこう)>

○事例1 彦崎貝塚(岡山市南区彦崎)出土貝類

国指定史跡 彦崎貝塚は、旧灘崎町に所在する縄文貝塚。平成15年から平成23年にかけて断続的に発掘調査が行われた。貝塚からは、多くの動物遺存体・魚骨・貝類が出土した。

腹足綱(巻貝類)は、現時点で12科19種類程度が明らかになった(図1)。

- ・ニシキウズ科 イシダタミ
- ・リュウテン科 スガイ
- ・エゾタマキビ科 タマキビガイ
- ・ムカデカイ科 オオヘビカイ(マガリ)
- ・ウミナ科 ウミナ、ホソウミナ、イボウミナ、ヘタナ、フトヘタナリ、カワアイ
- ・タマガイ科 ゴマフダマ(ヘンクリ)
- ・アッキガイ科 イボニシ、レイシ、アカニシ
- ・テングニシ科 テングニシ
- ・カワニナ科 カワニナ
- ・キセルガイ科 キセルガイ
- ・ヤマキサゴ科 ヤマタニシ
- ・オナジマイマイ科 セトウチマイマイ

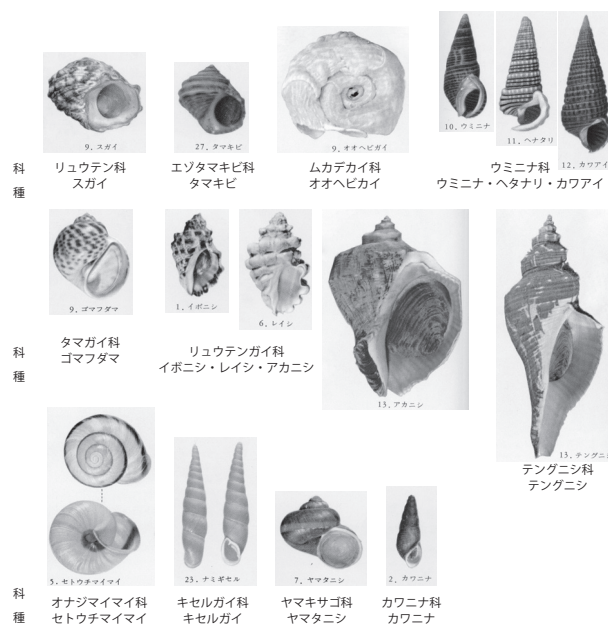


図1 彦崎貝塚出土 腹足綱(吉良 1954)

○事例2 南方遺跡（岡山市北区南方）出土貝類

南方（済生会）遺跡は、旭川西岸に位置する弥生時代中期の拠点集落の一つ。環濠やムラの出入口など弥生時代前期の集落様相も明らかになった。埋没河道から腹足綱が出土。

埋没の状況から、貝塚と判断された、弥生時代中期中葉頃の弥生貝塚。腹足綱は、アカニシ、テングニシ、サザエ、カワアイ、スガイ、レイシガイ、イボニシ、カワニナ、タニシなどが出土した。

ほかに、アカニシ貝製の貝輪未製品が見つかった（図2）。現時点で、38点確認。いずれも未製品で使用者の性別や年齢を特定することは困難も、貝輪装飾習俗や社会的意義を考えるうえで重要な資料といえる。また、同様の貝輪は、瀬戸内市の門田貝塚や島根県西川津遺跡で出土があり、今後、地域における使用の実態解明も求められる。

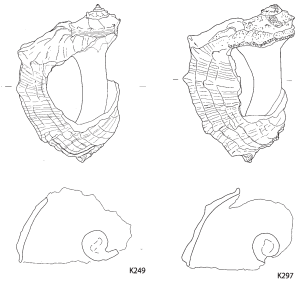


図2 南方遺跡出土
アカニシ貝製貝輪 (S=1/6)
(扇崎 2012)

○事例3 岡山城および城下町出土貝類

岡山城および城下町の発掘調査では、たびたび、直径3m程の大型土坑が検出される。これらの土坑は、「ゴミ穴」と呼ばれ、屋敷地の庭などに穴を掘り、日常生活で生じる生ゴミや割れた食器類などを棄てていたことが窺える。ゴミ穴は、江戸時代の食生活を考える上で、重要な遺構と捉えられる。ゴミ穴内部には、腹足綱もみることができ、アカニシ、サザエが代表的。

また、文献資料から、アカニシ、サザエ、テングニシ、タニシを食していたことが明らかになっている。

<巴形銅器>

○千足古墳出土巴形銅器

国史跡 千足古墳は、全国4位の規模を誇る造山古墳の周囲に位置し、造山古墳群を形成する古墳の1つで、造山第5号墳という名でも知られる。また、珍しい石室構造や直弧文を施した石障が石室内でみられることで著名。

巴形銅器（図3）は、伝・千足古墳出土品として今に遺るもので、明治末に乱掘された際に出土したとされる。巴形銅器は、円の部分に穴を通して、戦いの際に、盾や弓矢の矢を入れる容器（矢筒）に取り付けたとされる。弥生時代の終わりごろから作られた巴形銅器は、特徴的な形状からスイジガイ（水字貝）という南西諸島にみられる巻貝を模したのではないかと考えられる。

スイジガイの突起には魔除けの効果が想定され、呪力を秘めた貝として神聖視されていたとも捉えることができる。

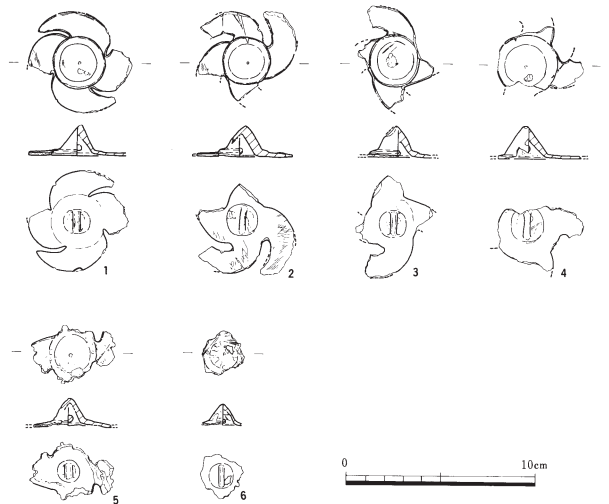


図3 伝・千足古墳出土巴形銅器 (S=1/4) (安川 2000)

◎小結

形状としての渦は、腹足綱や巴形銅器に見出すことができる。腹足綱は、貝塚でもみられるように、日常の食生活にのみ登場するものではなく、事例2の南方遺跡のアカニシ製貝輪のように、貝輪として、その呪力を利用していたものと考えられる。古墳時代になっても、腹足綱は、副葬品の一つに挙げられる巴形銅器のモチーフとして使用されたようで、模した巴形銅器もまた、呪力をもっていたものと考えられる。

これらのことから、形状としての渦と捉えることのできる腹足綱は、呪力を秘めたものとも考えられていたのではないかと。

②文様としての渦

文様の種類（図4）

渦文			弧帯文	S字状文（逆S字）	巴文	その他
渦巻文	双頭渦文	連続渦文				
						

図4 渦状文様一覧

○渦文…原始文様の一つ。ほぼすべての時代の遺物にみられる。

→渦巻文…渦が単体で巻いている文様。

→双頭渦文…両側に開くように渦が巻く文様。

→連続渦文…渦巻文ないし同心円を傾斜線でつなぎ連続的に表現する文様。

○弧帯文…帯状の弧を描く文様。

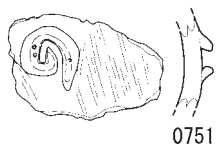
○S字状文…アルファベットの「S」に類似した形状の文様。

○巴文…蕨形（勾玉のような形）の頭をもった流線が円周に沿って流れる文様。

○渦文（渦巻文）



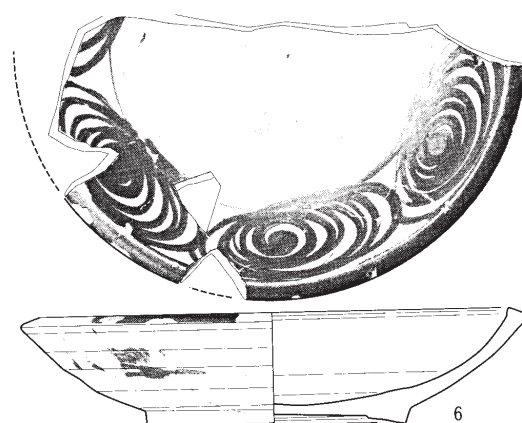
笠岡市・津雲貝塚出土
津雲A式 縄文土器
（安東ほか 2020）



岡山市・南方遺跡出土
弥生土器
（安川ほか 2016）

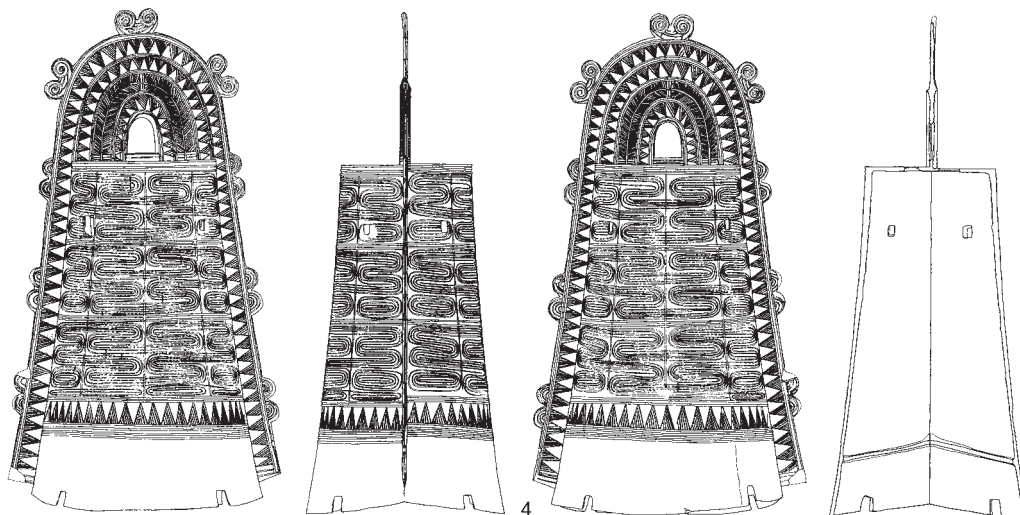


備前市・鶴山丸山古墳出土
渦文帯変形方格規矩八獣鏡
（備前市文化財管理センター 2020）



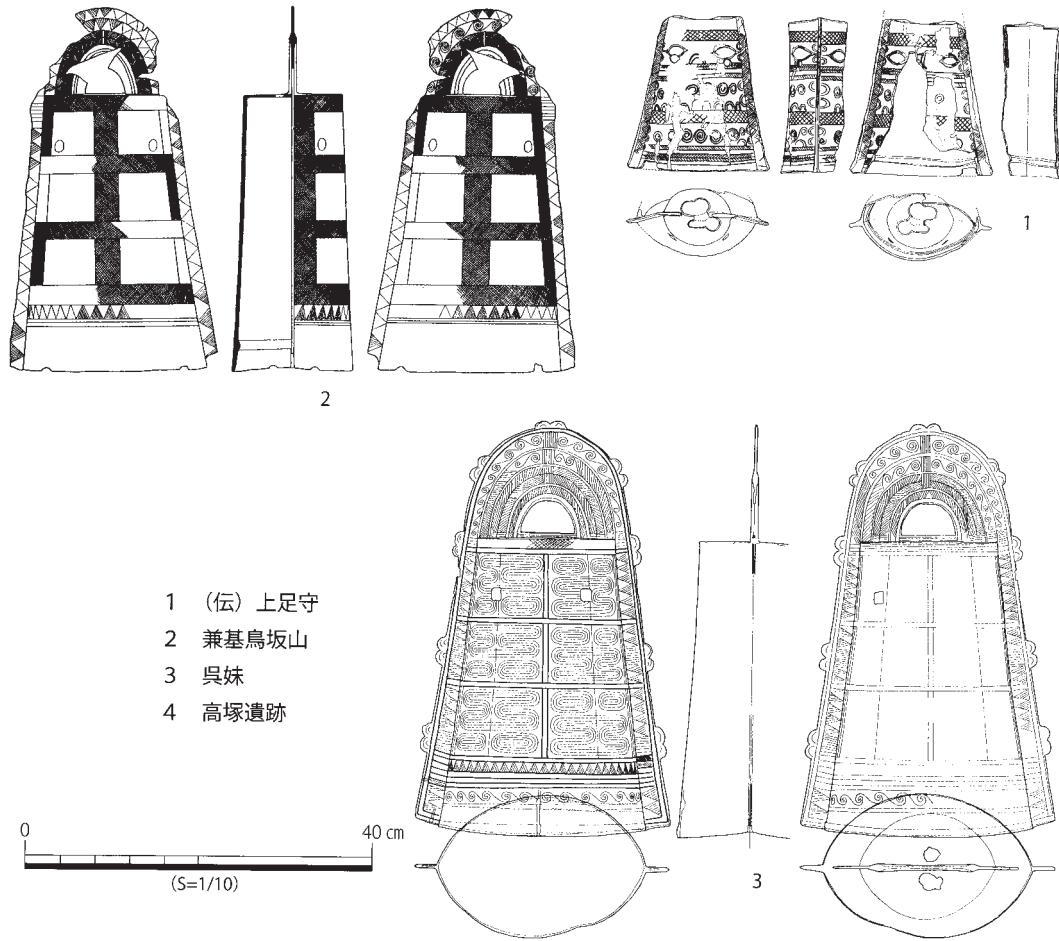
岡山市・岡山城三之外曲輪出土
瀬戸施釉陶器・馬の目皿（神谷ほか 2008）

○渦文（双頭渦文）



岡山市・高塚遺跡 突線流水紋銅鐸（南 2016）

○渦文（連続渦文）

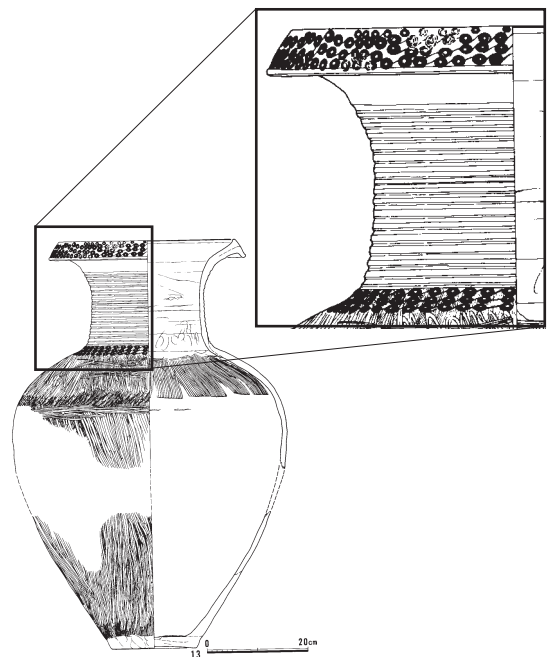


連続渦文をもつ銅鐸（南 2016）

1. 岡山市足守 2. 岡山市兼基鳥坂山 3. 倉敷市真備町呉妹

平形銅剣
倉敷市・瑜珈山
遺跡出土
(井上ほか 2003)倉敷市・上東出土
弥生式土器片（洗心 1941）

都窪郡庄村大字上東發見
弥生式土器破片、文様
（實物大）

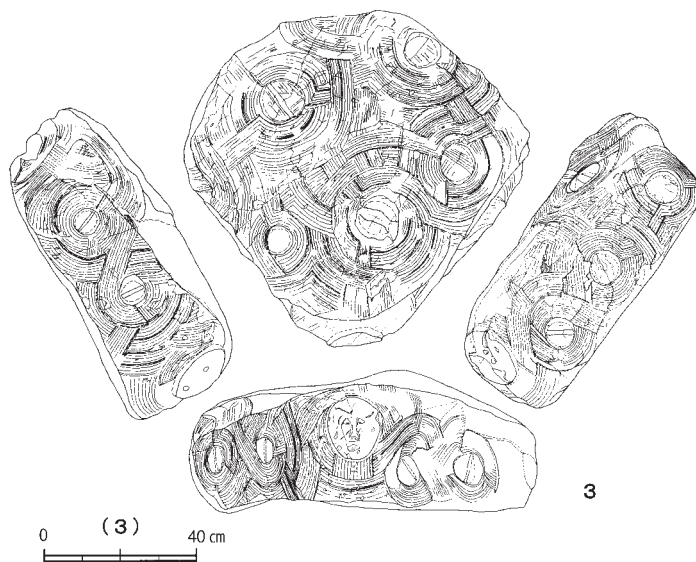
奈良県田原本町 唐古・鍵遺跡出土
吉備系大壺（藤田 1984）

○弧帯文

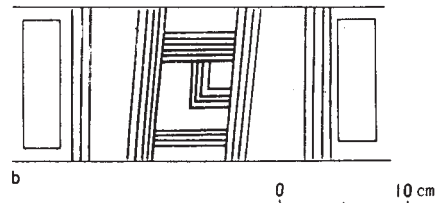
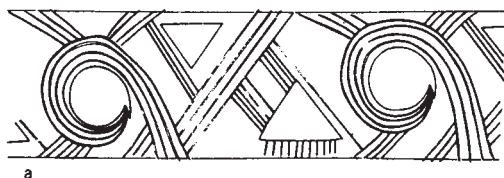
弧線が帯状に巻きついた複雑な文様。弥生時代後期、吉備地方の墳墓を中心に特殊器台や弧帯石などに描かれた祭祀的な文様。

遺物の呪術的性格を物語る特異な文様である弧帯文は、弥生時代から古墳時代への移行期の首長墓に供えられた特殊器台にみられるものと類似する。

特殊器台は、立坂型、向木見型、宮山型、都月型と変化していく。弧帯文は、型式変化に伴って様々なバリエーションを有する。

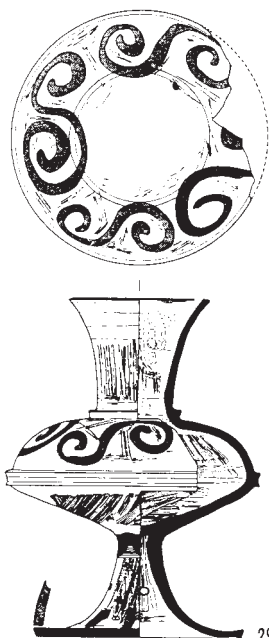


倉敷市・楯築弥生墳丘墓伝世 弧帯石（光本 2016）



岡山市・浦間茶臼山古墳出土 特殊器台形埴輪の文様（近藤・新納 1991）

○S字状文



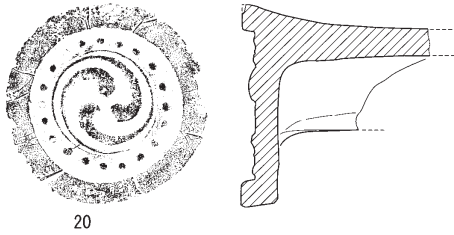
岡山市・百間川原尾島出土
台付き直口壺（正岡 1992）



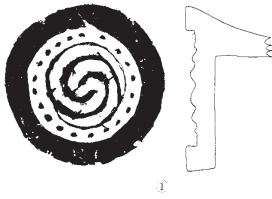
総社市・鋳物師谷1号墳墓出土
龍文鏡（南 2015）

S字状文は、その名の通り、アルファベットの「S」のような形状を呈する。上記の遺物は、いずれも、単なる文様として、施したのではなく、「龍」の文様が形骸化したものである。

○巴文



岡山市・清水廃寺跡出土
巴文軒丸瓦（高橋 2017）



岡山市・富山城跡出土
巴文軒丸瓦（水内ほか 1969）

蕨形（勾玉のような形）の頭をもった流線が円周に沿って流れる文様を呈する文様は、現在に残る寺院や城などの屋根でしばしば目にする。この文様は、平安時代頃に軒丸瓦に文様として取り入れられた。形状から水の渦巻きがその起源とされており、火災除けの意味が込められたと考えられる。

平安時代の巴文軒丸瓦には、三巴と二巴が存在する。のちに、三巴に統合化されていき、現在に至る。一見、文様がほぼ同じで、製作技法や焼成状態、胎土以外のアプローチでの時代判別が付きにくいものであるが、岡山城跡本丸中の段出土事例から、年代によってある程度、巴の形状が異なることが分かる。判別基準となるポイントは以下の通りである。

○巴の外周形状

圏線または圏線状を呈する。

（～ 17 世紀第 1 四半期 ～ 1625）

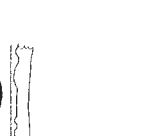
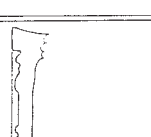
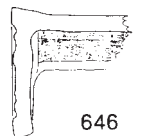
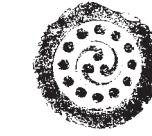
○巴尾部の長さ

○珠文の数

○珠文の大きさ

○巴部の径

○珠文の広さ

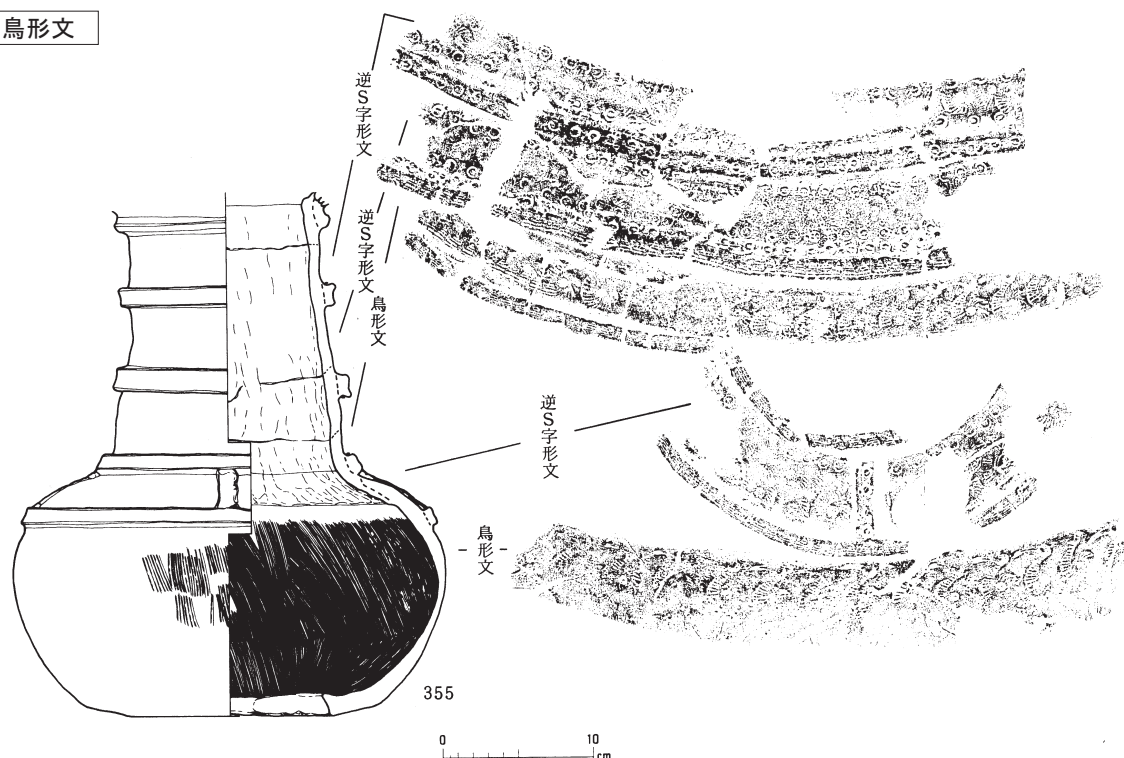
II 期	16 世紀第 4 四半期			515
				538
				589
III & IVa 期	17 世紀第 1 四半期			606
				464
V 期	17 世紀第 2 四半期			625
	17 世紀後半			626
	17 世紀末			632
	18 世紀			646
18 世紀末～19 世紀				677
				673

0 10cm

岡山市・岡山城跡本丸中の段出土
巴文軒丸瓦の変遷（出宮ほか 1997）

○その他

鳥形文



岡山市・平岡西遺跡出土 壺形土器（長谷川 1992）

蕨手状唐草文



岡山市・岡山城跡本丸中の段出土
金箔おし軒瓦（出宮ほか 1997）

そのほかの文様として、鳥形文、蕨手状唐草文が挙げられる。いずれの文様も、非常に珍しいものであり、鳥形文は、胴体の形状の特異性から管見の限りでは、平岡西遺跡特有の文様である。蕨手状唐草文は、先端が巻きあがった形状が植物のワラビに類似する。

○小結

文様としての渦は、渦文、弧帯文、S字状文、巴文などを中心として、様々な時代の遺物にみられる。渦文の意味は、青銅器を例にとっても考えると、マツリや祈りに用いられた器物に多く取り入れられており、祭文や呪術的な意味合いを捉えることができる。縄文土器や弥生土器も同様の意味合いが込められていると捉えられる。

祭文あるいは術的呪的な意味合いをもつものは、弧帯文も同様で、弥生時代のおわりから古墳時代初頭にかけて墳丘墓に供えられ特殊器台や楯築遺跡や鯉喰神社の弧帯石がその裏付けとなる。

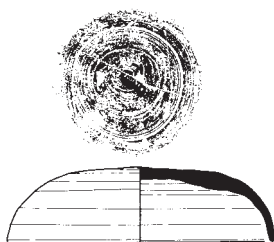
一方で、巴文は、火難の厄除けの意味合いが込められるとされており、平安時代から近代にいたるまでの長い期間、家の屋根に瓦として葺かれた。

ほかにも、伝説上の生物である「龍」が形骸化して、渦状の文様になったものがある。これは、龍という生物の概念を知らない工人が、ほかの龍の文様を参考にして描いたことなどが可能性として考えられる。

③技術にみる渦

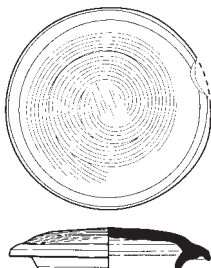
手工業の技術にも渦をみることができる。その最たる例は、窯業である。回転台を使用して作成された須恵器などが該当する。ここでは、特に、渦にみえる技術を5例取り上げる。

○回転ヘラズリ



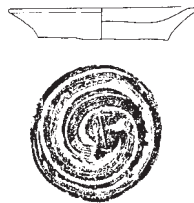
岡山市・塚段古墳出土
須恵器坏蓋（草原ほか 2016）

○カキメ



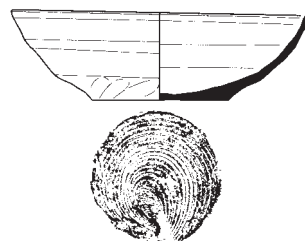
岡山市・塚段古墳出土
須恵器蓋（草原ほか 2016）

○ヘラ切り



岡山市・吉野口遺跡出土
皿（草原ほか 1997）

○糸切り



岡山市・塚段古墳出土
備前焼碗（草原ほか 2016）

○タタキ



須恵器大甕内部にみるタタキ（白石 1990）

○小結

技術としての渦は、須恵器や土器に幅広くみることができる。特に、回転台の使用が渦状にみえる要因であり、製作方法を今に伝えるものがある。ほかにも、回転台を用いずとも、工具でタタキしめることでタタキ文様が渦にみえるものが存在する。

4. まとめ

渦に関係する遺物は、数多くあり、大きく3分類し、形状から渦を捉えられるもの、文様から渦を捉えられるもの、技術から渦を捉えられるものを取り上げた。

形状については、腹足綱やそれに関する遺物が最たる例で、食用のみならず、腹足綱の呪術的性格を利用した遺物が存在する。

文様については、様々な種類があり、今回は、8種類の渦に類似する文様を取り上げた。渦に類似する文様であっても、祭文・呪術的性格をもつ渦文・弧帯文や火難の厄除けの意味をもつ巴文、龍が形骸化したS字状文など意味合いや文様成立の意味などは異なるものがある。

技術については、5つの技術を取り上げた。そのうちの4つは、回転台を利用することで発生する渦であり、土器がどのようにつくられたのかを示す痕跡である。残りの技術についても、製作をするうえで必要な技法を丁寧に行っていたことが窺える。

これらの3分野のアプローチから、遺物からみた渦は、人々の祈りや信仰、生活に密接に存在していたと捉えることができる。

5. おわりに

「渦」というワードから考古遺物をみると

- 遺物のもつ側面や新たな発見な気づき
- 意味の源流・文様理解の難しさ
- 文様や意匠に込められ意図・背景

参考文献

- 安東康宏ほか 2020『津雲貝塚総合調査報告書』笠岡市教育委員会
- 井上洋一・森田稔 2003『考古資料大観』6, 小学館
- 扇崎由 2012「南方（済生会）遺跡出土のアカニシ貝輪未成品」『岡山市埋蔵文化財センター研究紀要』第4号, 岡山市教育委員会
- 神谷正義・安川満 2008『岡山城三之外曲輪跡・岡山藩藩学跡』岡山市教育委員会
- 唐古・鍵考古学ミュージアム 2008『弥生デザイン』田原本町教育委員会
- 吉良哲明 1954『原色日本貝類図鑑』保育社
- 草原孝典・河田健司 1997『吉野口遺跡』岡山市教育委員会
- 草原孝典・寒川史也・高橋進一 2016『塚段古墳・坂口古墳』岡山市教育委員会
- 小野雅明・藤原好二 2021『中津貝塚』倉敷市教育委員会
- 近藤義郎・新納泉 1991『浦間茶臼山古墳』真陽社
- 白石太一郎 1990『古墳時代の工芸』講談社
- 洗心齋蔵 1941「都窪郡庄村大字上東発見弥生土器破片ノ文様」『吉備考古』49, 吉備考古会
- 高橋伸二 2017『清水廃寺瓦窯跡』岡山市教育委員会
- 田嶋正憲ほか 2006『彦崎貝塚』岡山市教育委員会
- 田嶋正憲ほか 2007『彦崎貝塚』2, 岡山市教育委員会
- 田原本町教育委員会 2015『唐古・鍵遺跡 考古資料目録 I』明新社
- 出宮徳尚・乗岡実・仲井光代・岡嶋隆司 1997『史跡岡山城跡本丸中の段発掘調査報告』岡山市教育委員会
- 長谷川一英 1992『平岡西遺跡 I』御津町教育委員会
- 備前市文化財管理センター 2020『まるやまこふんって何だろう?』備前市文化財管理センター
- 藤田三郎 1984『唐古・鍵遺跡 黒田大塚古墳』田原本町教育委員会
- 正岡睦夫 1992「備前地域」『弥生土器の様式と編年』木耳社
- 水内昌康・出宮徳尚 1969『富山城跡第2次調査報告』富山城跡調査団
- 光本順 2016「鹿田遺跡出土線刻人面土器の歴史的位置」『吉備の弥生時代』吉備人出版
- 南健太郎 2016「青銅器からみた弥生社会の実態」『吉備の弥生時代』吉備人出版
- 安川満 2000『造山第2号古墳』岡山市教育委員会
- 安川満・寒川史也 2016『南方遺跡』岡山市教育委員会

挿図出典

- 図1 吉良 1954 掲載図より筆者作成
- 図2 扇崎 2012 より
- 図3 安川 2000 より
- 図4 筆者作成